



# 大切な農作物を守ろう!

# 獣害対策



鳥獣による農産物の被害は、農家にとって深刻な問題。2007年度の当JA管内での被害は、面積で185.1ha、金額にすると4,883万4千円になります。一番の被害はイノシシによるものです。(千葉県農林水産部調べ) そこで今回は、被害金額の多いイノシシ・シカ・サルといった動物から農作物を守る方法について、独立行政法人農業・食品産業技術総合研究機構、近畿中国四国農業研究センター、鳥獣害研究チーム長の井上雅央(まさてる)さんにアドバイスをいただきました。

## 2 獣害から守れる田畑に変える

動物から農作物を守りやすくする秘訣(ひけつ)は、働きやすく、管理しやすい田畑にすることです。

例えば、柵ぎりぎりまで畝を立てて野菜を植えていませんか。また囲いの外まで枝を伸ばしたり、高い枝の果実をほったらかした果樹はありませんか。

畑の外に伸びた野菜、ほったらかしの果実は、動物の目につきやすく、しかも取りやすいため、格好の餌になってしまいます。農作物を放っておかないよう、高齢の方は田畑の管理ができる範囲に規模を縮小することも大切です。

より自分の田畑に合った方法を探すには、営農指導員や農業改良普及員に相談するのも一つの方法です。

## 3 自分たちで囲いや追い払いを

今までは(1)(2)を抜かして(3)の囲いや追い払いから始めていませんか? みんなで勉強して、守れる田畑づくりができてこそ、囲いが効果を発揮するのです。



### 人任せにしないで自分達で獣害を減らそう

獣害対策は、行政や業者、狩猟者にやってもらうものと思っている人も多いのではないだろうか。

しかし獣害対策とは本来、自分たちの田畑の農作物を守ることなので、他人任せにしないで、自分たちで取り組むことが大切です。

実際、鳥根県美郷町では、農家の婦人会が自分たちで勉強してサルと闘ったところ、獣害が減り、農作物の収穫量が増えて、青空市場で売れるほどになりました。効果的な獣害対策について、井上さんは次のような手順を挙げます。

- 獣害対策の手順**
- (1) みんなで勉強
  - (2) 獣害から守れる田畑に変える
  - (3) 自分たちで囲いや追い払いを
  - (4) 駆除や大規模柵

(4)は、行政などが行う対策になります。この対策をとる前に、自分たちでできる(1)(2)(3)を実践していくことが、効果が長続きするポイントです。

## 1 みんなで勉強

獣害は「以前は、たまにしか見掛なかった動物を見る回数が増えた。やがて人を恐れず田畑の農作物を食べるようになり、動物の数も増えた」というケースが多いようです。まず「なぜ、こういうケースが多いのか」を、考えるところから始めてみましょう。

集落に出てきた動物を、威嚇もしないで通り過ぎたことはありませんか?

これは動物にとって、「人間は怖くない」と思わせる「人慣れ学習」になります。

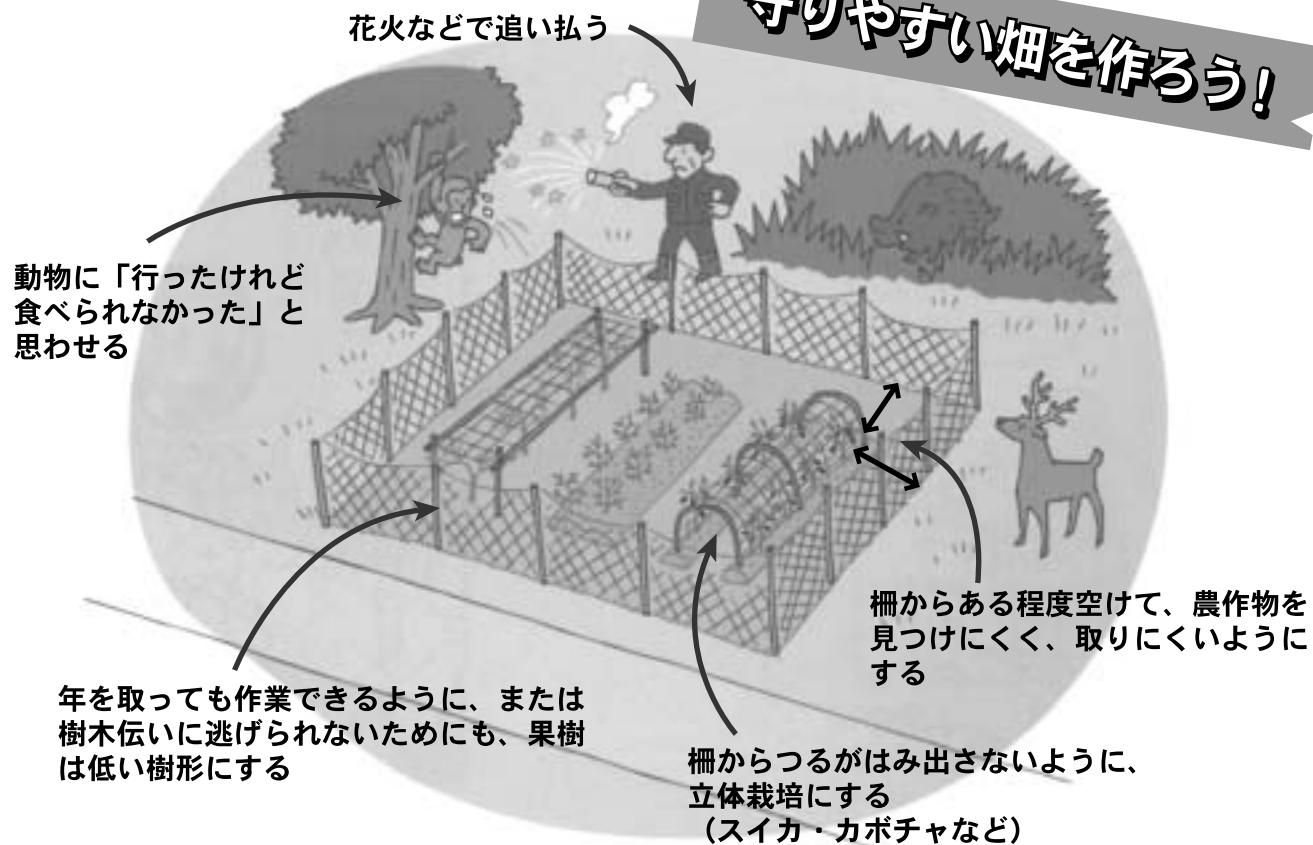
そして、動物が集落で餌を食べて、腹いっぱいになることを繰り返せば、それも学習となって、人間が動物を「餌づけ」したことに同じになってしまいます。

「人慣れ学習」と「餌づけ」が原因で被害が起きているのであれば、このことをみんなで理解し、対策に取り組むことが大切です。熱心な一握りの人だけが対策に取り組んでも、家族や集落全体で行わないと効果が出ないのです。

### こんな「餌づけ」をしていませんか?

- ・収穫をやめた農作物を田畑に放置している
- ・冬場に格好の餌場を作っている(ヒコバエ、あぜ道の雑草、道路ののり面の牧草など)
- ・茶殻や古くなった菓子を外に捨てている
- ・子どもが給食のパンを動物のために置いている

## 守りやすい畑を作ろう!



### 参考図書



『これならできる 獣害対策』  
井上雅央著(農文協:1,575円)  
イノシシ・シカ・サルなどによる獣害をかわし、田畑・集落を守っていくための着眼点を紹介しています。

繰り返しになりますが、獣害対策の基本は「人慣れ学習」や「餌づけ」をやめること。「みんなで勉強」し、「守れる田畑に変える」ことから始め、自分たちに合った対策を見つけて、一生懸命作った大切な農作物を守っていきましょう。

囲いの役割は「集落に行っただけで、囲いの中の農作物だけは食べられなかった」と動物に思わせること。例えば柵の近くに動物が来るときは、花火などで追い払います。また、隣人と呼んで集落のチームで協力し合うことも大切です。これは、動物が「行ったけれど食べられなかった」という学習をすることにつながり、被害も少なくなっていくます。